

「靖國神社を学ぶ」～近代日本と、神道と～

2020年12月1日（火）（一社）日本観光通訳協会(JGA)

第一支部研修終了レポート

令和2年12月1日（火）（9:20集合-13:15終了）、靖國神社におきまして、第一支部研修「靖國神社を学ぶ」～近代日本と、神道と～を実施いたしました。

遠くは福岡、大阪、名古屋から、37名（会員36名、非会員1名）の方が参加くださいました（運営委員2名を加え、合計39名）。コロナ禍の第三波の中で実施が危ぶまれましたが、靖國神社様のご協力もいただき、行政のガイドラインに沿って、感染予防に細心の注意を払っての実施となりました。ご参加の皆様には、私語を極力控えていただき、ご質問も研修終了後にメールでお寄せいただく。JGA研修では常に活発に質問が寄せられますが、今回はいつになく静かな研修となりました。皆様のご協力のお陰で、混乱も滞りもなく、無事に研修を終えることが出来ました。



月次祭参列にあたり、手水、それから用意されたテントに向かいます（拝殿が耐震工事中）。祝詞を奏される前に笛の音が聞こえ、ピリッとした空気が流れました。最後に本殿に昇殿し、遠方からご参加の3名様、参加者を代表して玉串奉奠をいたしました。普段目にすることがない白い装束の神職の方がずらりと並ぶ光景に、神道の尊い祭祀に参列させていただけた、と実感しました。

その後屋外に出て、穏やかに晴れた青空のもと、講師の権禰宜後藤智司様のご案内で内苑を見学しました。神池庭園や招魂斎庭、鎮霊社など、普段見過ごしがちな重要な場所も



ご説明いただき、参加者はメモをとったり、写真を撮影したり、熱心に耳を傾けていました。

最後に啓照館で、講師から靖國神社の概要や遊就館についての講義を受けました。靖國神社の使命はご祭神の慰霊と、そのみこころを未来に継承していくことである、とのご説明があり、遊就館の展示の中でも、ご祭神のみこころとそこご家族の想いを伝える手紙などを重点的に紹介されました。



海外からのお客様の中には「戦争博物館」という認識で訪れることもある遊就館ですが、入ってすぐに目を引く零式戦闘機やC56型31号機関車なども、多くの方々の死と共にあった「遺品」であるとの言葉に、はっとしました。遊就館の展示物の多くが、ご祭神とその犠牲を忘れず、その御霊を慰め、その思いを伝えるために寄せられたものである事実に気付き、全国通訳案内士として靖國神社をご紹介する責任の重さを改めて実感。国を護る気持ちと平和への願い、また大切な人を喪う悲しみは万国共通、それをきちんとお客様に、また未来へと伝えていくことが大切であると思いました。

参加者には遊就館の招待券をお配りし、研修終了後は、各自密を避けてご自由に境内散策や、遊就館の拝観をしていただきました。日を改めて遊就館をゆっくり拝観したい、という方もいらっしゃいました。

今回の研修にご協力いただいた靖國神社様に、心より感謝申し上げます。

